

皇帝ナポレオンの歴史に裨益するための ロヴィーゴ公の回顧録

〈1〉

アンヌ・ジャン・マリー・ルネ・サヴァリー（著）

今居清綱（訳）

目次

訳者によるはしがき	iii
-----------------	-----

『皇帝ナポレオンの歴史に裨益するためのロヴィーゴ公の回顧録』第1部.....	1
--	---

緒言	1
----------	---

第1章	5
-----------	---

著者の軍務入り——議員の陣営入り——トーシア氏の処刑——危うく王党派として逮捕されそうになったこと——最初の軍功——ピシュグリュとコンデ公の密計——サンプル及びムーズ方面軍での危険な任務——嫌疑を受けたピシュグリュがモローにすぐ替えられる——著者がライン川渡河で中隊長に任命される——レオーベンでの仮条約後の戦闘停止、ドゥゼ將軍の副官になる——著者がドゥゼのパリ行きに同行する

第2章	18
-----------	----

ボナパルト將軍のパリ帰還——総裁政府による彼の歓迎——彼の学士院への指名——イングランド上陸計画の頓挫——ドゥゼ將軍のイタリア派遣の密命——エジプト遠征の準備——ウィーンでのベルナドット——チヴィタ・ヴェッキア港——ガレー船の奴隸——エジプトへの出発

第3章.....	31
----------	----

マルタ到着——艦隊の合流——町への攻撃——騎士団の降伏——我々が夜間にイギリス艦隊と遭遇したこと——アレクサンドリア到着と上陸——先発隊の指揮が著者に委ねられたこと、馬匹揚陸の計略——アレクサンドリア攻撃と占領——我々の最初の砂漠進軍——あるアラブ女との出会い

第4章45

エル・カッフェル——アラブ人との最初の遭遇——兵士が考案した新しい硬貨——ダマンフル——司令部が晒された危機——ナイル川到着——砂漠での行軍隊形——エジプトでのガレー船奴隷——マムルーク——ナイル川での戦闘——ピラミッドの戦い——カイロ占領

第1章

著者の軍務入り——議員の陣営入り——トーシア氏の処刑——危うく王党派として逮捕されそうになったこと——最初の軍功——ピシュグリュとコンデ公の密計——サンプル及びムーズ方面軍での危険な任務——嫌疑を受けたピシュグリュがモローにすぐ替えられる——著者がライン川渡河で中隊長に任命される——レオーベンでの仮条約後の戦闘停止、ドゥゼ將軍の副官になる——著者がドゥゼのバリ行きに同行する

著者の軍務入り

国家の軍旗の下で齢を重ね、長い軍務への報償として少佐の階級と聖ルイ騎士団十字勲章を得たに過ぎない将校の息子だった私は革命が勃発した時には辛うじて修学を終えたばかりだった。私の運命もこのようになるはずだった。私とその目標に達する機会は軍務以外になく、その危険の中を突っ走ることになった。

私の兄は砲兵隊で勤務していた。父は砲兵隊なら死ぬ危険を冒すことなく確実に昇進できるからと言い、その道を私も歩んでくれることを望んでいた。しかし私は騎兵隊が気に入っていた。その仕事は非常に金がかかるし裕福な若い貴族でなければやっていけないと思われたが、騎兵隊に参加することへの私の意志は固かった。断固たる決意、勇気、そして私の剣をもってすればもちろん巡り合わせの悪さを埋め合わせられるはずだと私は思い描いていた。

私は父が勤務しており、当時は反乱を起こしていたナンシーの守備隊⁽¹⁾を鎮圧するためにドゥ・ブイエ氏の麾下に編成されていた小規模な軍に加わるべく進んでいたノルマンディーの王立連隊に加わるようになった。私は決定的な瞬間に到着したため、軍務に入って初っ端に最初の夜を露営で

⁽¹⁾ 1790年8月31日にナンシー駐屯部隊は反乱を起こした。

過ぎ、初日から砲火に晒されることになった。

スタンヴィル門⁽²⁾を通してその都市に入った部隊の一部を私は組織し、私が最初に目撃した人死には我々への発砲を妨げようとして味方の兵に殺された勇敢なシュヴァリエ・デ・ジューの死だった。ドゥ・ブイエ氏は彼の軍をそれらの守備隊の方へと送り返した。この將軍は私が入ったばかりだった連隊への配慮を示してくれ、連隊全体も無尽蔵の支持で気持ちを返したが、それを彼に証明するさらなる機会は訪れなかった。

この時に胸甲騎兵将校の過半数は、いたるところで公然と表明されていた主張と対立する主張を明言したために革命の発起人たちの非難の的になった。挑発と脅迫が犯行を生み出し、追放がすぐに続いて起こった。王立ポーランド連隊の将校たちはリヨンで殺され、ベリーの王室連隊の将校たちはパリでギロチンで斬首され、ブルゴーニュの将校たちは一斉に解任され、ナヴァールの将校たちはブザンソンで迫害されて町を立ち退くことを余儀なくされ、全員がその犠牲になった。我々は不安を覚えたが、我々にとって幸運なことに宣戦布告が公衆の心の矛先を逸らしてくれた。

我々はストラスブールで命令を受けた。私がドゥゼと知り合って彼と密接な関係を築く幸運に恵まれたのはこの時だった。彼は大尉で、ヴィクトル・ドゥ・ブロイ公子⁽³⁾の副官であり、その地で組織された軍の参謀長だった。間もなく起こった 8 月 10 日の出来事⁽⁴⁾は新たな暴力の口実となった。ブロイ公子は解任され、ドゥゼはビロン將軍の部隊に所属することになった

(2) 現在のデジュー門。なお、この門はデジュー中尉（一般的に Désilles と綴られるが、サヴァリーは彼の名をデ・ジュー（des Isles）と綴っている）を称えてデジュー門と名を改めた。

(3) ブロイ公ヴィクトル・フランソワの息子で、貴族でありながらジャコバン派に属していたが 1794 年にギロチンにかけられた。

(4) 1792 年のこの日にパリの民衆が王とその一族を捕えてタンブル塔に幽閉した事件。

た。私の連隊の将校のほぼ全員が職を退くことを余儀なくされ、少数の者たちが転属して多くの者は所領に引っ込んだ。この時に私は自分がキュスティーン將軍の命令に服することになったのを悟った。

その間にシャンパーニュ侵攻が起こり、ヴェルダンとロンウィーが落とされた。ランダウとヴィサンブールの間に集まった軍は、ヴァルミーで戦ってプロイセン軍の進軍に待ったをかけた軍と合流すべくロレーヌを通過して進んだ。同時に我々はマインツを占領してライン川を渡り、フランクフルトへと突進した。これらの成功は喜びに我を忘れさせたが、短期間しか続かなかった。これらの後に逆転が起こった。ほとんどの場所で敗退したために我々はランダウの城壁から追い返され、退却時にはマインツに守備隊を残した。

議員の陣営入り

これらの敗北を言い逃れるためにこの上なく馬鹿馬鹿しい主張と、疑わしくこの上なく不合理な話がでっち上げられた。そして議員たちが陣営に到着した。言い立てられた陰謀を発見するために送られた議員たちの目には皆が陰謀者に映った。そして彼らが見て取ったのは褒賞への期待から告発者に成り下がったあまりにも多くの悪漢だけだったことを私としては認める外ない。無秩序と混乱の時期にあってフランスの名誉は軍の中へと逃げ込んだと言われた。また、この新種の総督によって不信が我々の間に座を占めることになったと言えるかもしれない。各人は仲間を避け、武装した献身的な仲間になづくのを恐れたが、しかし何より、獰猛な獣のもとから逃げ去りたくなるのと同じ気持ちから議員は避けられた。見かけ上は奇妙なことであろうが、その一方で彼らの恐怖政治の措置は彼らの周りに恐怖を醸成し、完全に自惚れながら無知を誇示しつつ彼らが言い放った決定ときたら、己への嘲笑を上塗りしているかのようなものだった！　せせら笑いと嫌悪による身震いが同時に感じられた。

ヴィサンブール線で、カルランという名の竜騎兵大隊長を旅団將軍とし